

水環境保全総合計画関係の有識者ヒアリング結果について

1 実施日

令和4年10月11日（火）、10月18日（火）

2 概要

(1) 信州大学名誉教授 沖野 外輝夫 氏

- 水収支については、降雨量、河川流量、蒸発散量を把握し、地下浸透量を推定することになるが、こうした基礎的な調査をきちんと実施することが重要。
- 今後の中長期的な課題として、地下水の涵養だけでなく水質浄化や局地的な大雨対策の観点からも、道路側溝から雨水が地下浸透する仕組みなどを検討していくことが必要。
- 近年は家庭用の肥料・薬剤の使用が増えているが、水質に悪影響を与えるおそれがあることを周知することが必要。
- 県外では、外来種のホテイアオイが田んぼの用水路を塞ぐなど問題になっている。今後、温暖化が進むと、県内でもホテイアオイが越冬できる可能性があり注意すべき。
- 水産資源の持続的な利用について、気候変動への適応策として、在来種との競合に配慮した上で新たな魚種の導入などを検討すべき。

(2) 信州大学理学部教授 宮原 裕一 氏

- 長野県の水資源の情報を整理することは、災害時の対応にも役立つ。市町村ごとにどのような情報があるか整理するだけでも有用。
- 温暖化により川の水温が上がると、生産と呼吸のバランスが変わり水環境にも影響を及ぼす。データをしっかりとっていくことが重要であり、様々な部署が、様々な目的で定期的に測定している水温などのデータを組織的に共有すべき。
- アレチウリ以外にも外来種の繁茂で困っている事態は全国各地で起きており、県内の川、湖、池でも、侵略的な外来生物が温暖化の影響で水温が下がらなくなることで越冬できる可能性がある。国や他県の動向にも注意を払うことが必要。
- 情報発信、学びの推進として、水辺の植物のうち駆除する必要があるものの、希少種であり抜いてはいけないものについて、啓発、教育に取り組むことが重要。

(3) 信州大学理学部物質循環学コース助教 榊原 厚一 氏

- 地下水には流出域^{※1}と涵養域^{※2}があり、どの辺がより涵養されているかを調査して施策を講じていくというアプローチが重要。
- こうした調査をする場合、地下水位を面的に測定することが最も簡単な方法であり、地下水位が維持されているか、下がっているか、継続的にデータを把握して有効な施策につなげるべき。
- 福井県大野市では、毎日、観測井戸の水位を住民がモニタリングし、井戸付近に掲示することで、地域住民に地下水位を知らせる取組をしている。そこを通る人たちに、普段は目に見えない地下水の重要性を知ってもらう機会になっており、こうした観測地点が複数あればデータとしても有用。
- 冬季は河川が涵養源として重要であり、涵養機能が損なわれない構造などを検討していくことも重要。
- 普段は子供たちなどが水と親しむことができ、大雨のときは雨水を貯めて防災の役割を果たす「遊水地を兼ねた公園」を設けることで、住民が水とのつながりを意識し、学ぶ機会となる。
- 今後の温暖化の影響で、雪の量が減り、雪溶け水が減ってくると、水循環のみならず、水質にも影響が一定程度あると思うので、今後はそういう視点も必要。

※1…地下水が地下から地表面に向けて湧き出す地域。谷部やがけ部など

※2…地表から降水の浸透が起こり、地下水が涵養されている地域。山地斜面、水田地帯など